

「ふむ」

「はて變だとは思つたが折角此處まで來たのだからと思つて露次を入ると、君の家の庭門の前で立つてるだらう、おや、變だぞ、思つたが仕方がない、側へ寄つて見ると豊圖らんや君の細君だらうぢやないか、あツはゝゝゝゝ」

「はゝゝゝ、それぢや昨夜の男は君だつたのか」

「面目次第もございませんといふ奴ぢや、照隠しに勝海さんの露次ぢやございませんでしたかねとやると無論違ふと仰せだらう、高麗橋二丁目は、と呆けると、まだ四五丁も上手だと被仰いましたかねツて奴ぢや、あツはゝゝゝゝ、細君笑つてたらう、君」

保は顔を突き付けるやうにして、

「君だつたのか」

が、つかりしてまた、

「君だつたのかい、悪いことしたなあ」

三九、神のお使ひ

間もなく松井は歸つて行つた、保は玄關まで送り出すと直ぐに其足で病間へ入つて行つた、春江と英子の外誰も居なかつた。

「正木といふ人は何うした」

春江は泣き腫れた眼を向けて、

「お歸りになりました」

「歸つた？」

「はア」

保は羽織に帽だけ冠つて、黙つて家を飛び出した、そして教會へ急いだのであつた船場教會には五人の信徒が詰めてゐた、二人は男で三人は女である、若先生の正木

を圍んで口々に

「先生、何うなさつたのです」

「まあ、大變な御負傷、お眼の上が斬れてますわ」

「好うまあ眼の球へ來なんだもんだんなア、電車でも衝突したんちやおまへんのか

「袖口かて大變ぞすね、襟かて脇開かて、喧嘩お仕やしたんやおへんのごすか」

「喧嘩をなさる正木さんでないが、何しろ大變な傷だ、血が大層出たと見わた

ら頬へかけて川のやうに流れた跡がある、正木さん、早くお手當をなさらんと熱が出

ても大變だし、第一眼ですからな、悪くすると其儘見なくなることもあります、有

澤博士の處へお越しになつては何うです、私が紹介します」

八方から心配さうに云つた、正木は罪のない笑顔をして、

「大丈夫です、親様が放つてはお置きになりません」

「それは爾ですけれど」

と信徒の一人が反て眉を寄せて、

「全体何うなすつたのです、斜に斬れてゐる處を見ると轉び傷でも打ち瑕でもあり

ませんね、屹度切石か茶碗かを投げ付けられなすつたものらしい、敵手は何者です、

訴わてお遣んなさい、一ト通りの負傷ぢやありませんせ、先生」

正木はまた眼だけ笑はせ、

「訴わると云つて敵手は親神様だ、お氣に叶はせられんことがあつて私にお灸をお

點ねになつたのだから、懺悔を申し上げて心を立て直すより夜はありません、其間に

お氣に叶はせられたら傷は自然に癒して下さる、何事も親任せ神任せです」

「爾被仰れば其れに違ひありません」

居合すもの一同手を膝に置いて首肯してゐた。

五人の信徒の外に今一人、柱の蔭に身を倚せて腕を拱み、首を垂れて切と感嘆の太

息を漏す男があつた、それは保であつた。

一座肅然〇

やがて、正木のおさづけが初まった、最初に出たのは四十二三の女であつた。

「先生、手足の節が疼きまんのやわ」

云つて腕を巻繰て見せた、烏の足のやうに垢が黒くこびり付いてゐた。腕より頸が一層黒い、襟から袖口が脂汗と垢とで、かゝくに光つてゐる、何う見ても其日稼ぎの女房であつた。

殊に顔が一段と異彩を放つてゐた、両の下脛が裏返つて赤い肉を見せ、口か左の方へ振れて黄色い前歯が下唇を呑んだやうに出てゐる、何とも云へぬ臭氣が保の鼻にまで芬々匂つた。

けれど正木は微塵も厭さうな顔をしなかつた、恚ういふ人を助けてこそ、神の御心に叶ふのだと思つて、熱誠を罩めて親様の助けを求めた。

「悪しきを拂ふて助け給へ天理王命あしきをはらふて……」

手を振り、眼を閉ぢ、懸命に祈をかけた、膝が自づと蹴り出て顔と顔とが加付くやうに寄つて来た。柱の蔭の保の方が反て身顛ひしたほごであつた。そして、

「春江もおさづけをして貰つてゐたのだ」

といふことが初めて分つた、同時に、良心の苛責が保を何那に苦しめたか知れなかつた。化物の正体見たり枯尾花、姦夫と思つた正木は、清い正しい神の使徒であつた

「正木さん」

保は柱の蔭から走り出て、突如正木の腕を把つた。

四〇、君の弟子になる

「正木さん、許して呉れ給へ」

保は力一杯正木の手を握つた。それが餘りに不意であつたので、正木は思はず身を退きかけたが、真心の宿つた保の眼許を見ると、正木も保の手を握り返して、

「岩佐さん、お分りになりましたか」

「分りました、正木さん此通りだ、許して呉れ給ね」
保は両手を膝に、心の底から頭を下げるのであつた。

「お分りになつたら是れほど嬉しいことはありません」

正木は先づお社の方へ両手を支いて、

「あなた様のお働きで、奥様の疑ひが晴れました、御禮を申し上げます、天理王命
更に保に向き直つて、

「好く分つて下さいました、私は嬉しくて溜りません」

正木は嬉し涙まで零した。

「正木さん、許して呉れますか」

保はまだ心配さうに聞いた。

「許す許さんもないぢやありませんか、貴方さへ分つて下さつたら是以上結構なこ

とばありません」

「では正木さん、其傷の手當を僕にさせて呉れ給ね、幾許要つても僕の方で引き受
けます、これから一緒に病院へ行つて下さい、お願いだ」

云つて、手を把らんばかりにした。正木は押へるやうに止めて、

「岩佐さん、私の此傷は病院では癒らない傷です」

「爾那、そんなことがあるものか、是非僕と一緒に来て下さい」

「まあお待ちなさい、私は、貴方に殴られたとは些とも思つて居りません」

「だつて、事實僕が殴つたぢやありませんか」

「貴方は神様のお手先に使はれて下さつたのです、云つて見れば私の方で貴方をお
氣の毒とも思ひ、お禮も云はなければならん立場になつて居るのです、殊に貴方のお
口から、許して呉れといふお詞が出た以上、此上貴方に御心配かける事は毛頭ありま
せん、斷つて心配して下さいと私は神様に申譯が立ちません、反て私をお苦しめにな

ると同様です、決して御心配はありませんが、傷は直癒して戴きます」

「でも、それでは僕の良心が承知しない、僕の良心を安心させると思つて手當をさせて下さい」

「岩佐さん、それほど被仰つて下さるなら憐うして下さいませんか、貴方のお口から神様へ一ト言でよろしい、正木の傷の癒えますやうにとお願ひして下さいませんか、その方が百人の博士に診察せて戴いたよりも私には何れだけ好く利くか知れません」そんなこと位の安いことぢやありませんか、それでは」

と、懷中から十圓紙幣五枚出して紙に包み、

「これで滋養物でも喰べて下さい、あれだけ出血したのだから軀が弱つて居ます、ね、正木さん、これだけは怒らないで納めて呉れ給ね」

正木は手も觸れずに、

「岩佐さん、人間の血の補ひは眞の道を踏むことです、眞の道さへ踏んで神様にお

ひさへすれば、飯一ト粒口へ入れなくツても汚い血が五体に満ち渡ります、無駄ですからお返しませう」

保は沈と頭垂れて考ねてゐたが、顔を擡げると同時に、

「好い神様だ」

思はず叫んで両手を膝に支き、

「正木さん、僕を信者にして呉れ給ね、今日から僕は君の弟子になる」

「好く被仰つて下さつた」

正木ははら／＼涙まで零しながら、今更に神のお働きを驚喜せずには居られなかつた。掌を結んで神の御名を唱へた、居合す信徒も皆、神の御名を唱へた。

四一、日本晴れ

病間では春江が英子の介抱をしてゐた、先刻の騷擾に聲を潤して泣いたので、英子

の熱は一層高まつた。

氷嚢を替へ、脊中を擦つて、漸このことに病兒を寝かせると春江は篋笥の前に俯伏しながら祈つた。

「良人を怒らせましたも、先生を彼那目にお遣はせ申しましたも、皆私の科でございます、阿姑様に行き届きませんが、良人に盡し方が足りませんか、何れかの御咎めでございませう、今日唯今から心を改めて、阿姑へも良人へも眞心を罩めて仕わさせて戴きます、良人の疑念の晴れますやう、お助け下さいませ、良人はあなた様を信仰いたしませんけれど、私が良人の分をも合せて信仰いたします故、英子の病氣も御癒し下さいませやう、併せてお願いいたします」

神のお名を唱へて両手を合せた時、

「春江、春江」

優しい聲が耳許で呬やくやうに聞けた、春江には神の呬きのやうに聞き做された。

「おい、春江」

春江は何心なく振り回ると其處に良人の保が座つてゐた。

「あッ、良人」

向き直ると保は膝頭に両手を置いて、

「春江、濟まなかつた、許して呉れ、お前のやうな、正直女を疑つて濟まなかつた
「わッ」

春江は半ば驚き半ば悦んで、

「何でございます、良人」

「疑つて濟まなかつたといふのだ、これも皆阿母や照子の策略に乗つたのだ、蹴倒してやつても腹が癒えないやうに思ふが、これも皆僕の心が濁つて居たからだ、濁水に駆け込まれたのだから要するところ僕が悪い、他人は怨まん、今日から心の埃を拂つて、清水のやうに澄み切らせる、そしたら自然神の御心も宿させて貰ふことが出来

「英も、二人の心が合つて、天理に反かぬやうにさへしたら神が助けて下さるさうだ、此軀を借物だと聞くと、心の持ち方で病ひは癒せるといふことが信じられる、聖書にも盲目の眼が開き、跛の足が立つたといふことが書いてある、僕は奇蹟といふものを何うしても信ずることが出来なかつたが、今日正木君から教理を聞いて初めて信ずることが出来るやうになつた、奇蹟ぢやない天の理だ、盲目の目も開き、跛の足も立つべき道理なのだ」

春江は面を擡げて、

「良人は眞實に爾信じて下さつて？」

「信ずるよ」

「中途でお心の變らないやうにして下さいましね」

「變るものか、信仰は年と共に深くなるべき筈だ」

「病氣だつて治ることばかりはございませんよ」

「いや、治る、治るべきものと信ずる」

「いねく、神様の思召ですから、治ることもあり治らぬこともございます」

「治らないのは其人の信仰が徹底しないからだ、神に通じないからだ」

「だつて、人間には因縁といふものがございますもの、幾許信心の方だつて、因縁の解けない方は不幸の續くものです」

「ぢや、因縁の悪い人間は信じても駄目な分なんだね、幸福の身にはなれない理なんだね」

「不幸に遇ふ度に因縁を解かせて戴くのです、ですからお終には幸福な人になれますわ、此世で幸福にならなくつても次の世で」

「ぢや、お前は英子の病氣が治ると思ふか治らんと思ふか」

「神様のお心任せですもの、何方とも云いませんわ」

「僕は治して見せるが何うだ、人間でも誠を通ずれば屹度相手の心を動かすことが

出来る、神に真心さへ通じたら屹度治して下さるものだ」

「その意でお道を信仰して下さいね、英は二人の子なんですもの、二人でお道を信じさへしたら英も大きく成人するだらうと存じますわ」

「諾、大に信するぞ、見て居れ、今に僕の方が説教して聞かせるやうになるから、教理が基督に好く似て居る、だから大變信仰に入り易い、これから天理教に關する有りたけの書物を讀むんだね」

「良人」

「何だ」

「お道を研究なすつたんぢや駄目よ、真心から信仰するんでなくツちや」

「無論だよ、僕はお前のやうに表面を信じないんだ、奥底を究めるんだ」

「十柱の神と八ツの埃さへ信じて守つて行けたら、眞實の信者だと被仰つてよ」

「待て、これから教祖の人格から調べてかゝるんだ」

「あら、それぢやまだ信じて被居るんぢやないんですわね」

「信するからこそ教祖の人格を知りたくなつたんぢやないか」

「まあ、爾」

春江は嬉しさに嫣然した。

四三、さもお社

翌日も保は銀行を休んだ、そして御教祖の實傳から天理教講演文集まで全然讀んで了つた。

所々不審の點もあつたが大体に於て教祖の人格を窺ふことが出来た、教祖傳では神憑の前後を最も注意して讀んだ。

「中山美伎子といふ人は生きながら神に化つたのだ、飯降御本席には神と化つた教祖の靈が宿つたのだ、神すなはち宇宙の眞理だ、宇宙の眞理が具体的に天理教となつ

て實現したのだ」

同志會出版の「天理教祖」を二度繰返して讀んだ時、保は英子の枕許で恁う云つて本を閉じた。

「偉い、偉い女だ、慈悲の權化であつた美伎子の靈に神の宿つたのは必然の結果だ雷が手近な高い木へ落ちるのと同理だ、教祖の聲、即ち神の聲で、信ずるに足るぢやないか」

云ふことの總ては分らなかつたが、信ずる心になつたことは春江にも充分呑み込めた。

「結構な教ねでせう」

と云つた、保は力強く頷いて、

「結構だ、モルモン宗とは違つて一夫一婦主義だからお前なんかにとつては最も結構な教理だね、はゝゝゝ」

「爾ですわ、此お道では色情の間違ひが一等罪が深いんですもの」

「其信者に向つて不義呼ばはりしたのは何處までも僕の過失だつた、改めて詫びるぞ」

保は両手を膝に支いた、春江は濟まぬらしく、

「最う好ござんすわ其事は、過ぎたことなんですもの」

「慥かに心の埃だつた、これから朝夕心の掃除をしなければならぬ、ところで神棚だが、丹波市へ行つて買つて來うか」

「まだ好ござんすわ、お社は良人の心の立替が出來てから後でも遅いことはございませぬ」

「併し、目標のあるといふことは好いものだ、早速買つて來やうぢやないか」

「それほど拜みたげや、私のお社を拜むで下さい、神様に差別はないんですから」

「お前の神様は何處に被居るんだ」

「此處ですよ」

云つて簞笥の開戸を開けて見せた、お鏡だけは皎々と光つてゐたが、洗米は白紙の上、御水は新らしい猪古の中にあつた。

保は熟々見て、

「これがお前の神様かい、随分さもお社だね」

「だつて、私の心では一間半の神棚より尊いのですわ」

「爾だ、お前のお社は風呂の下で燃されたんだね」

「私に、阿姑様を大事にせよといふ神様のお知らせでしたのよ」
保は首を捻つて、

「爾だ、阿母や照子を信者に引き入れなくツちや、我家では公然お社を祭れない譯だね、諾、一番母と妹を説き付けてやらうかな」

「お蔭を戴いてからお勧めなすつたら可ござんすわ」

「お蔭といふと信念の神に届いた時か」

「英子の病氣の癒くなるやうに、真心を罩めて祈つて見ませうね、良人」

「爾だ、英子といふ病人が居る、諾、僕の信念で屹度治して見せるぞ」

四四、有難い教理

春江の心の導きで保の信仰は一日一日と深くなつた、朝夕の禮拜は夫婦揃つて勤めた、醫者の横山は其れ以來一度も来なかつたが、英子の病氣は日に日に快くなつて、五月の中旬頃には家の内を匂ひ廻るやうにまでなつた。

「これがお蔭だ、こら、お前はお蔭で助かつたのだぞ」

英子を両手で高く差上げては、保は恁う云つた、英子は「ちやうよ、父ちやま」
でも云ふやうに、きやつくと笑ふのであつた。

父子の笑ひ聲を聞いて、春江は「お蔭」を神に感謝せずには居れなかつた。

保や春江の顔が歡喜に綻ると、同時に、武子や照子の眉は段々擡んで來た。

「助からんでも好いものが助かりやがつて、小五月蠅い」

英子の聲を聞く度に武子は顔を擡めて呟いた、照子も眉間を皺めて、

「好く助かつたわね阿母さん」

「眞實に助かつたんぢやありやしないよ、見て居て御覽、今に死んだふから」

「だつて、死にさうな様子は些ともありやしないわ」

「死ななくつても乳放れをするまでさ、天理さんなぞに何時までも頑張られちや我が家が第一立ち行かない」

「天理さんつて阿母さん、阿兄さんも天理さんよ」

「阿兄さんはお前耶蘇ぢやないか」

「いゝね、天理さんだわ天理さんの本を讀んだり、天理さんのお咄ばかりしてよ」

「嘘をお云ひよ、阿兄さんが天理さんなぞになるものかね、天理さんの正木とかい

ふ男は阿兄さんの敵ぢやないか」

「大違ひよ、正木さんと阿兄さんとは兄弟のやうに仲が好いわ、銀行の歸途を教會へ寄つたり、二人で散歩に出たりなんかするわ」

「ぶーッ」

武子は吹き出して、

「正木と阿兄さんが仲が好いつて、ぶーッ、笑はせるわね、間男と仲好になつて女房を後生大事と守れば是ほどお芽出度いことはありやしない」

「だから、阿兄さんも全然天理さんに成り切つてるわ」

「阿兄さんが天理さんに成り切つてるツて」

「はい、阿兄さんに遇つて天理さんのこと悪口して御覽なさいよ、本氣になつて怒るわ」

「呼んでお來で、照子、阿兄さんと呼んでお來で」

武子は血相變れて云つた。照子は走るやうにして阿兄を呼びに行つた、或日曜日の朝であつた。

待つ間もなく照子が保を連れて來た、武子は離座敷に居るのであつた。

「保さん、大層天理さんが有難くなつたんださうですね」

保が座るのを待ち兼ねて武子は嘲るやうな調子で云つた。保は熱心に、

「爾です、阿母さん大變有難い教理ですよ、何時かは貴方にもお勧めしやうと思つてゐたのです、好い機會だからお咄ませう」

「め、滅相もない、な、何をいふのです」

武子は顔色まで變れて手を振つた、照子は横手に座つてくすくす笑つてゐた。

四五、借物ご埃

「阿母さん、まあ欺されると思つて教理を聞いて下さい、心が自と澄んで何とも云

へぬ結構な氣持になります」

保は諄々と説き初める。

「お互に此軀を自分の物だと思つたら間違ひですよ、これは神様から拜借した借物なんだから、此煙管でも」

武子の前の煙管を拾つて、

「此煙管を阿母さんから僕が拜借したとしますよ、阿母さんは貸した方で僕は借りました方だ、恚うして煙草を詰めて吸つて居ても何時貴方が返して呉れど被仰るか知れない、元が貴方の煙管だから返さないといふ譯に行かない、はい、お返しいたしますと貴方の手へ戻すと僕の手には最う煙管はない、僕といふものはあつても煙管がない、靈があつても軀がない、煙草が吸ひたくツでも吸ふことが出來ない、生きて行かうと思つても軀がないから生き行けない、すなはち死ぬのです、も一つは此煙管を借りて」

ど、また煙管を拾ひ上げて、

「何うせ借り物だ、何時戻せといふかも知れない、借りてる間に思ひ存分使つてやれといふので、煙管が潰れるほど火鉢の縁で叩いたり、雁首を火の中へ突ッ込んで脂をじゆうく云はせたり、らゝを詰らせたりして御覽なさい、貸した方の貴方が御覽なすつたし屹度戻してお呉れと被仰るに相違ない、それも他人とは異つて母子の仲だから好い頃までは我慢して見て居て下さるに違ひないが餘り亂暴に使ふといかな阿母さんでも返せと被仰るでせう、仕方がないから返しますね、後から、阿母さん最一度貸して下さいと云つてもお前は亂暴に扱ふから最うく貸さないと被仰るに決つてゐる、強つて貸して下さいと頼むと阿母さんは僕が可愛いから絶対に貸さないとは被仰らない、お前は亂暴だからこれでお睨りといふので眞鍮か鐵の煙管を出して貸して下さい、此金煙管は二度と貸しては下さるまいと思ふ、それと同じやうに何うせ生れたものは死ぬに決つてゐる、太く短かく、仕ただけのことはして除けやうといふので

食ひ過ぎて胃を悪くしたり、悪事を働いて監獄へ入れられたりしてゐると屹度借物を返せと云はれる人に決つてゐる、恁那人には神様は最う二度と金煙管はお貸しになりません、眞鍮か鐵で我慢しなげやなくなる、これと反對に、借物だからと思つて大事に扱つてさへ居れば、神様は何時までも借して置いて下さる、假し一旦お返ししても、二度目に拜借する時もお前は大事に扱つて呉れるからとあつて金煙管の方を貸して下さるに決つて居ります、それから煙管でも時々掃除といふものをしないと脂が溜る、人間も心の掃除が肝腎です、八ツの埃と云つて天理教では大事な要目になつて居る、此埃を掃除を忽にすると、脂が溜つて煙管が使わなくなるやうに、折角の借物を持って餘さなげやならないやうになります、ほしい、おしい、かあい、にくい、うらみ、はらだち、よく、こうまん、此八ツの埃は得てして心に群りたがるものだから朝に晩に、悪しきを拂ふて助け給へと神に願ひするのです」

「あア」

照子は両手を揚げ大口を開けて長い欠伸をした、武子は「フン、馬鹿々々しい」と横を向いてゐたが、

「何うです、お蔭でもありましたか」

云つて嘲るやうに鼻で弾いた。保は眞面目に、

「絶わすあります、心の平和が第一のお蔭で、目に見ゆる例では英子の病氣の癒つたことです」

英子と聞いて武子の額に見るく青筋が浮いた、かと思ふと俄に立ち上つさ大急ぎで他所行の仕度にかゝつた。

「阿母さん、何方へ？」

保が心配さうに訊いた、武子は噛み付くやうな聲で、

「親類へ相談に行くのです、家を潰しちや御先祖へ申譯が立ちませんからね」

「阿母さん、それは貴方の」

後を何とか云ひかけた時、お竹が眼色を變れて走つて來た。

「旦那様、お嬢様が、大變、大變でございます、

喚び立てる聲に保は宙を飛んで病間へ走つた。武子は、

「ざまあ見ろ」

氣味よさうに見送りながら、とつと戸外へ出て行つて了つた。照子は離座敷で仰向けに寝轉んで大聲で唱歌を謳つてゐた。

四六、お道病院

岩佐家の親戚は本町橋の西詰にあつた、大阪でも名代の蒲團商で、二百五十圓といふ正札附の絹蒲團が分厚な硝子戸の中に飾つてあつた。

武子は色を變れて此店の鬨を跨いだ。六七人の番頭手代が一齊に手を支いて迎へたけれど金庫の側には御寮人の顔が見えなかつた。

「不在かい、賢ごん」

武子は番頭に聞く、賢ごんは帳場格子の中から上り願まで出張つて、

「はい、今日は生憎、旦那様も御寮人さんも京都の方へお越しになりました、夕景にはお歸りでございます、何うぞお上りやして」

「爾、留守かい」

武子は落膽して庭に立つてゐたが、折角相談に來たのだからとでも云ひさうにすんく奥へ通つて廁を借りた、手洗鉢の處で濡れ手を拭きく、

「仲や、濟まないが俵を雇つてお呉れ」

勝手の方で女中の返事が聞けた、やがて俵が來たと手代が知らせに來る、武子は手代女中に送られて其家を出ると、俵を高津の横山へ走らせるのであつた。

「車夫さん、横山といふお醫者だよ」

「へい、分つて居ります、近頃評判のお醫者様で、高津のお道病院と云へば大抵な

者が知つて居ります」

云ひく走つて居る。武子は俵の上から、

「お道病院」

考へて、

「車夫さん、それは違ひはしないかい」

「違はねえ筈ですが」

「だつて、評判の立つほど流行るお醫者ぢやないんだよ」

「お名前は何と被仰るんで」

「名は横山哲夫といふのだがね」

「それなら違ひはございません、横山哲夫と被仰る若い先生ですが却々お慈悲深いお方で、俺の癖も血の道で彼院のお世話になりましたが、十日経たねえ間に全然快癒して貰ひました、其また藥代の安いこと、云つたら俺も吃驚した位で、一ヶ月ばか

り前までは馬鹿に薬代を貧る先生でしたが、お道病院になつてからころつと變りまして、十日通つてお前さん、薬代が唯二十錢ですせ、一日分二錢といふ勘定だ、世界中探したつて恁那安い薬代があつたもんぢやねね、それで利かねかといふと他所の病院の二三倍が利くんだから怖ろしいぢやございませんか、俺の嫌だつて爾です、近處のお醫者に四十日診て貰つて十圓若干薬代を拂つて、それで鼻糞ほごも利き目がねねんですせ、そいつが唯の二十錢で全然治つちやつた、俺らのやうな其日稼ぎの人間に取つちや、横山先生は神様か佛様でさ」

玉なす汗を拭きく、

「それも薬代が幾許と決つた譯ぢやないんで、本人の心任せと氣任せで好いと被仰る、加之に金のないものは金でなくつても好いんです、假に俺が病氣で先生に治して貰つたが金がねねといたしまさア、先生、金がございませんから俵を曳かせてお呉んなさいといふ譯で、先生が病家へお出でましたの時に俵へ乗つて貰つてそれでお禮を濟

ますことも出来るんで、植木屋は植木を持ち込む、石屋は石を持ち込む、中には辨當持で七日も通つて、お禮の爲めに下足番をやつた男も居りますせ、そんなだからお前さん、流行るの流行らねねのつて、廣い大阪でも彼れ位の流行る病院は數はねね、それが僅か一ヶ月足らずの間だ、怖ろしいもんでさ」

四七、宛らの俱樂部

聞く度毎に武子は意外の眼を睜つた。

「爾那に流行れば収入も好いだらうね車夫さん」

「収入は今云つたやうな塩梅式で、心任せ氣任せですから思ふほごにはねねだらうと思ひますがね、何しろ治らねね病氣が治るんだから中には随分立派なお方も見ゆるやうです、人の噂だから嘘か眞か分らねねが、何でも堂島の相場師でドエライ病氣に罹つてゐた人が横山先生に助けて貰つたつてんで、五萬圓とか、十萬圓とか出してお

道病院を建て廣げる約束になつてゐるさうで」

「ふーむ、まあ、爾ですかい」

武子は呆れた顔をして、

「人間といふものは分らないもんだね、何時の間に爾那腕を覺わて來たんだらう」

「腕で治すんぢやねわんですな」

「ぢや、何で治すの？」

「心で治すんで」

「心で治す」

「へい、病の元は心からと云つて、四百四病は皆心の持ちやうで起るんださうで、俺の癖なぞ随分嫉妬家のがんがら、がんでした病氣が治ると一緒に心が全然直りましたがなア、有難い病院でさ」

「ぢや、お道の話でもするのかい」

「何ていふもんですかな、俺ら學問がねわから分らねわが、兎に角悪いことするな善いことしろつていふ教わで」

「屋敷を拂わだの、田を賣り給わだのと云つて踊るんぢやないのかい」

「爾那ことはしねわ」

「ぢや違ふのか知ら」

小首を捻る間に俣は南へ南へと走つて、やがて高津町へ入つて來た。

「お客さん、彼處でさ」

車夫の指さす方を見ると、行く手に俣の八七挺列んでゐる家がある、其家は果して横山哲夫の病院であつた。

俣が軒前で止つて、「お道病院」といふ看板の掲つた入口を入つた時、武子は玄關先に脱ぎ捨てた履物の多いのに先づ膽を抜かれた、赤い鼻緒の利休、禿びた堂島、靴、雪駄、空氣草履、足駄に塗下駄が庭一杯に埋つて、それこそ足の踏み場もなかつた。

薬局には出戻りの姉と十四五の小娘がちり／＼舞ひしてゐる、患者控室は薬局の前から元の診察室、看護婦室、茶の間、客間の障子や襖を全然取り脱して、駄々広い大廣間に繕らつてあるが、其廣い場處が老若男女の病人でぎっしり詰つてゐる、碁盤を圍むもの、將碁を戦はすもの、辨當を開くもの、笑ふもの、語るもの、宛らの俱樂部である。四邊に哲夫の姿は見ねなかつた。

「豊子さん、豊子さん」

武子は薬局の方を向いて呼んだ、豊子は哲夫の姉の名である。

「おう、岩佐の小母さんですか」

云つたかと思つて、窓口に列べてある十四五本の空嚢を抱ゆるやうにして調劑所の方へ消れた。

小娘が樂の入つた嚢を運んで來ては患者の名を呼んで渡す、渡す端から空嚢が窓口に行列するので折角出て來た豊子は直ぐに空嚢を抱えて調劑所の方へ消れて行つた。

武子は物の一時間も薬局の前に待ち呆かされてゐた。

四八、それは結構です

武子は待ち兼ねて側の患者に、

「先生は何處に被居るんですか」

「病氣を見てお貰ひなされるのですか、札をお持ちですか」

「札とは？」

「順番札がなくツちや却々、私などは五時間も前から來て漸と今診て貰つたところ、私が三十二番だから今お越しになつたのでしたら五十番も六十番もでせう」

「いね、病氣ぢやありません、先生に用事があつて來たのです」

「それなら其處の廊下を傳つて裏座敷へお行でなさい、先生が居られます」
「有難う」

武子は裏座敷へ通つた、哲夫は次の患者を診察るところであつた。

「横山さん、お久瀧」

「おう、岩佐の小母さんですか」

云つた切患者を診察てゐる。

「病氣は何うです」

「お蔭で大變宜しうございます」

「それは結構、心さへ正しく持てば病氣は自然に治ります、快くするも悪くするも貴方の心次第です、心の掃除さへ出来たら軀の故障は自然に除れます」

「はい、寝ても覺めても教理を守つて居ります」

患者と哲夫の應對を武子は横手に座つて黙つて聞いてゐた、患者が去るとまた患者病人が退るとまた病人が出て來た。

「横山さん、鳥渡お手は抜けまんか」

武子は溜り兼ねて恚う云つた。哲夫は病人を診察ながら

「御覽の通りですからね、朝からまだ一碗の飯も食わない始末で」

「今に土藏が建つてせうよ」

「お蔭で患者は殖ゐる一方です」

「私、横山さん、お願ひがあつて來たのだが迎も駄目ですね」

「何ういふ御用です」

「我家の保が天理さんに成つ了つたんですよ」

「それは結構ですね」

「何ですツて」

「大變結構です、貴方も一刻も早く天理の道をお聴きなさい」

「人を、人を馬鹿にしてゐる」

「爾いふ詞が全然出なくなります、はらだち、よく、こうまん、皆埃の内ですから

ね」

「保と同じやうなことを被仰る」

「教理に二つはありません、天理の教は一本筋です」

「ちや、貴方も天理さんですか」

「勿論、恁那に患者が来て下さるのも天理教を信ずるお蔭です、悪いことは云はない、是非貴方も天理教の信者にお成んなさい」

「馬鹿にして下さるな、失禮な」

怖ろしく哲夫を睨め付け、

「明日にでも照子を娶つて貰ふと思つたが、天理さんと聞いて全然興ざめがして丁つた、好く嫁げると云はなかつたことだ」

哲夫は相手にならずにせつせと患者を診察して居る、武子は手持無沙汰に口の内でぶつくと云つてゐたが、挨拶もせず立關まで出て来た、立關には五六人の血氣者が手

拭の振鉢巻で「御禮」と書いた立札の米俵を擔ぎ、揉みに揉んでゐたが旋て其れを藥局の前に据わて、

「先生にお助けを給つた森田組の難波富でございます、眞の心ばかりの御禮、先生に宜しく」

一齊に鉢巻を脱つて一禮して去つた、武子は茫然と立關に佇みながら、
「寧ろ照子を娶つて貰ふ……いや、なまんだぶ、なまんだぶ」

四九、聞き合せ

武子は俵を飛ばせて岩佐家へ戻つた、入口に一輛の俵が待つてゐた、それは島本といふ醫學博士の自用車であつた。

「阿母さま、英子が大變可けないのよ」

照子までが色を變つて報告した、武子は寧ろ當然だと云ひさうな顔で、

「罰が當つたんだよ、怖いものだね」

「罰ッて何の罰？」

「私の云ふことを逆つて天理さんのやうなもの信ずるからです」

「豊夫」

「そしてお前は天理さんが好きかい」

「好きッて譯はないが悪いことぢやないわ」

「屋敷を拂へッて踊る意かい」

「屋敷を拂へぢやないわよ、悪しきを拂わよ、私、阿兄さんの借りて來た天理さんの本を讀んで見たわ、中山美伎子ッて偉い人よ」

「まあ、お前までが……」

武子は呆れたといふ眼許をして」

「爾那本なぞ讀むことはありません」

「だつて悪いこと書いてなくッてよ」

「悪いことだよ、家を潰したり妻子を路頭に迷はせたり」

「それは其人の信仰に依るわ、何時か横山さんの云つた通りよ、女に何すると同」
だつて」

「横山と云へばお前、天理さんの處へでもお嫁に……」

云ひかけて直ぐに思ひ直し、

「いや、保の方を片付けなくッちや世間が五月蠅い、照子」

「なあに」

「英は餘ッ程悪いのかい」

「わい、島本博士も二日持つまいと被仰るんですッて」

「わッ、何ですッて」

武子は嫣然して、

「二日持たないだらうッて」

「はい、爾云つてよ」

「まあ、爾かい」

嬉しさうに吻として、

「あの、お前日外阿兄さんが何うとか云つてたね、奈良の池の畔で」

「女學生のこと？」

「爾です、あれは何處やらの方だッて云つたッけね」

「丹波市の松室ッていふ人の娘さんよ」

「ああ、爾でしたね、松室々々、ちや、仇地と同じ土地だね」

「仇地ッて私知らないわ」

「爾だつたかね」

「そして阿母さん行く意？」

「聞き合せだけでもね」

「だつて、嫂さんッてものが居るんぢやないの」

「親戚との相談が英子の乳ばなれするまでといふ約束なんだし、英が何うせ助からなげや、一刻も早く運んだ方が好いからね」

「だつて、松室も天理さんよ」

「親が天理さんだから子が天理さんと決つた譯でもなし、氣の優しい娘だつたら幾許天理さんだつて私の型に倣つて呉れるだらうからね、兎に角聞き合せに行つて見やう、寒之進さんにも暫く逢はないしするから」

「そして、氣に入つたら何うして？」

「氣に入つたら娘とも付かず、嫁とも付かずに我家へ寄越して置いて貰ふと思つて阿兄さんの氣が自づと其娘に移るだらうし、春江は居辛くつて自分の方から暇を取るだらうし、彼方此方が好い譯だからね、そして、私の手で充分仕込んでさへ置けば、

嫁にしてから阿兄さんの天理さん位直きより、が戻せる」

「生憎其人が、嫂さんのやうに天理さんの凝り塊だつたら滑稽ね」

「だから、聞き合せに行くのぢやないかね」

五〇、仇地寒之進

英子の大病を他所に武子は俵を湊町まで走らせた、湊町驛から汽車で王子まで乗り付け、王子から輕便鐵道に乗替わて丹波市で下車した。

武子が仇地を訪ねるのは最初であるが、仇地寒之進で邸宅は直に知れた、本部への參詣道を左に反れて、天に聳いた神々しい教會の屋根を見ては、

「屋敷を拂はせたり、田を賣らせたりして建てたお宮だ」
と思つた、そして、身の毛を彌立て、天理教を怖がつた。

「御免下さい」

仇地の玄關に立つて武子は聲をかけた、堂々たる門構の立派な住居であつた。

男の子が走つて出て武子を見ると直ぐに奥へ駆け込んだ、寒之進に好く似た子だと思つてゐると、其子の母親らしい女房が出て來た。

「御主人は御宅でございますか」

「今お客様ですが、貴方は何處から」

「私は大阪の岩佐です」

「鳥渡待つて下さい」

奥へ入ると少時經つて五十近な主人が出て來た、仇地寒之進である。

「やア、岩佐の武さん、まあお上り、其後暫く、御壯健で」

挨拶が濟んでから客間へ導かれた、客間には白髯の瘦せた男が頑張つてゐた。仇地は武子を其隣に座らせて置いて、

「處で大川君、何うする、負ける負けんか」

白髯の男は大川策次郎であつた。

「悪いことは云はない、其値で買つて置きなさい、狩野探幽の山水が八千圓で買ねることは掘つてもあることぢやない、十日経たぬ間に私が一萬三千圓か賣つて與げます」

「眞物でさへあれば私も向ける家があるんぢや」

「眞物も眞物、正直正銘正札附といふ奴だ、仇地さんのことぢやから二萬圓位に賣る意でせう」

「爾は賣れんわい」

「何處です、遠方ですか」

「二時間もあれば行つて來られる處ぢやがな」

「櫻井ぢやな」

「何處か其れは云へん、君が直接に持つて行つて見、三文も此方の口錢にならんが

な」

「爾那的があるなら尙のこと、八千圓で手を打ちませう、さ、仇地さん」

「五千圓に負けとけ、また儲けさせることがあるよ、君とは昨今の交際ではなし、天理教の飯を食ふ以前からの交際ぢやないか」

「だから是れまでに何百萬圓儲けさせて與げたか知れんぢやありませんか」

「それやア君ぢやない、天理教が儲けさせて呉れたのぢや」

「坪二十錢でも買ひ手のない地所を坪何百圓で天理教へ賣つて身代を三百倍にも五百倍にもしてゐる貴方ぢやありませんか、八千圓位唯見たいなものだ」

「爾は行かんよ、八千圓といふと大した金ぢやからね、それに今は手許に金が一文もない」

「冗談ぢやありませんで仇地さん、貴方の處に金がなくツて何處にあるんです、本部の前の地所だけでも、總額二三百圓のものを十四五萬圓に吹きかけて居るぢやあり

「ませんか、宛で金に埋つてるやうなものだ」

「それちや品物を明日まで置いて居て貰ふ、明日來給ね、何とか返事をする」

「濡れ手で粟の掴み取りかな、爾は問屋が卸さねねと來た、仇地さん、今金が要るんでなげや、八千圓は愚か一萬圓でも放せる代物ぢやないのです、畢竟今晚無くツちやならん金だからのことですよ」

「仕方がない、最う一枚出さう、それで手を打てよ」

「一枚とは千圓ですか」

「馬鹿なこと」

「百圓」

「冗談ぢやない」

「ちや幾許です」

「五圓札一枚よ、五千五圓だ」

流石の大川も呆れて、

「ふん、阿房らしくもない」

五一、三島の提婆

「ちや最う五圓出さう五千十圓」

仇地は金を取りに立つて、

「何うちや、可かんにや止めるが」

「仕方がない破れかぶれた」

大川は吸ひさしの巻蓑を自暴に火鉢へ挿し込んだ。武子はお茶も貰わずにけろんとしてゐた。

「さ、五千十圓」

百圓札を五十枚に十圓札を一枚添えて渡した、大川は軸物に受取を渡して金を納め

「これが明日までには二萬になるんだから一ト晩で一萬五千圓の利益か、金は金を呼ぶと好く云つたものだ」

「二萬圓には賣れんが一萬圓の口錢は大丈夫ぢや、はゝゝゝ」

「爾金を溜めて何うする意です、些と天理教へ寄附でもしちや何うです」

「馬鹿なこと、誰が天理教なぞに呉れてやる奴がある」

「でも、殆んど天理教のお蔭ぢやありませんか」

「天理教のお蔭ぢやない、私の運が強いのもぢや」

「御先祖は教祖に助けられたといふ咄ですせ」

「それやア先方の勝手ぢや、助けて呉れど頼んだ覺は毛頭ない」

「云つて了やア爾那もがだが」

「爾那こと云つて貴公は何うぢや、八九年も天理教の飯を食つて現に思ひ切つたことやつとるぢやないか、昨日から今朝へかけて大騒ぎだつたぞ」

「其奴を見物かたぐい出て來たんですがな、これや仕方がない、敵討ちぢやから」

「獨立運動で思はく通り金にならなんだ腹癒か」

「云つて見りや、まあ爾那もんぢやな」

「五萬圓はごせしめたといふぢやないか」

「冗談を、誰が爾那に呉れるもんですか」

「話半分と見て二萬圓は取つたらう」

「却々」

「隠さんでも可い、何でも世間の噂ぢや、一萬圓とか二萬圓とか功勞金を貰つて置いて、一文も貰はんと云つて二重取りをやり損なつて入獄ひ込まされたのだと云ふとるぜ」

「世間の奴らは何那ことをいふか知れたもんぢやない、恰ど貴方のことを三島の提婆だと云つてると同一だ、はゝゝゝ、いや、これは失禮を、御免」

大川は匆々に去つて了つた。仇地は後ろ姿を見送つてから、

「彼奴却々悪い奴ですからな」

初めて武子に咄しかけた、武子は腹の裡で「好い相撲だ」と思ひながら、

「時に寒之進さん、私少しお頼みがあつて來たのですがね」

頼みと聞いて仇地は直ぐに眉を寄せた、そして成るべく頼まれぬやうに軸物を床に掛けて、態と其方ばかり噴め、

「これから此奴を持つて櫻井へも行つて來にやならんし、却々多忙しいので……まあ、これで一萬圓は大丈夫かな、巧く行くと一萬五千圓か」

「實は貴方思ひに態々來たのですが」

「來て下さいと頼んだ覺わはない筈ぢやが、併し手間の取れんことなちな」
軸物の山水ばかり噴めてゐる。

「嫁の聞き合せですがね」

「嫁の聞き合せ」

武子の方を振り回つて、

「誰の嫁です？」

「保の嫁ですよ」

「保さんにはまだ嫁はなかつたのですかいな」

「あるんだけれど氣に入らないのでね」

「最う離縁したのですか」

「まだ居ることは居るのですよ」

「居る間に後釜の詮索ですか、早手廻しの好いことぢや、はゝゝゝゝ」

五二、源が狐憑

「全体何處の娘を娶ひたいといふのです」

仇地は金の無心でもなさうなので漸と安心して席へ直つた。

「松室といふ人の娘を見初めたのですからね」

武子は煙管を拾ひながら云つた。

「松室の娘を」

仇地は驚いて、

「松室の娘を見初めて何うするのぢや」

「本人さへ優しい娘だつたら娶ふかと思つて」

「監獄へ入れられるやうな人間の娘を娶ふて泥棒でも生ませる意か、それも好から

う、はゝゝゝ」

「監獄へ入れられるやうな人間とは」

「松室のことよ、まだ知んなさらんのか」

「些ども」

「爾ぢやろな、昨夜遅かつたから、見て居るが好い、今日の夕刊か明日の新聞には
屹度出る、

昨日から今朝へかけて天理教は大騒ぎぢや、検事が来る、警部が来る、探偵巡査が
大衆出て来て松室を奈良へ連れて行つて了ふた、今頃は奈良監獄で臭い飯でも食はさ
れどるぢやらう」

「へ々ツ、松室といふ人か」

「爾ども、嫁入ごころか、家内中が蒼くなつて泣いどるわ」

「おやゝ、そして寒さん、泥棒でもしたのですか」

「まあ、泥棒見たいなものよ、三十萬圓とやら四十萬圓とやら、胡魔化したとか盗
んだとかいふ咄ぢや」

「天理さんは是れだから虫が好かないんですよ」

「松室ばかりぢやない、天理教の奴は皆香具師見たいなものぢや、今の男を大川と

云つて先度まで天理教に居つた男ぢやが、脅喝で監獄へ入られて先月出獄ばかりぢや

「あの人ですか、松室に入獄られて松室を入獄かへさうとしてゐるといふ男は」

「爾です、好く知つてられるな、大体、天理教の源が狐憑の婆さんぢやからな、狐憑を道具に使ふては百姓を訛して山や田地を巻上げるのが商賣ぢや」

「爾でせう、私も爾だと思つた」

「云つて見りや、訛す奴が伶俐で訛される奴が馬鹿よ、はゝゝゝ」

「あア怖い、何う思つても天理さんは怖くてならない、好くまあ此家へ聞き合せて来たものだ」

「松室が引ツ張られた後へ来たのは貴方の運が好かつたのぢや」

「全く爾です、好い機会に來たものだ、此事を親類へも咄して急に嫁を離縁ことに運ばなければならぬ」

「それが好い、天理教などになるものぢやない、家を潰すに決つころ」

「何うも有難ふ、お蔭で岩佐家が助かります、それではこれでお暇ませう」

「もうお歸りか、お茶も呈げずに、何さま多忙しいものぢやで、これからまた軸物のことで櫻井まで行かにやならん、へい、左様なら」

武子を匆々に送り出してから、仇地は軸物を提げて櫻井へ出かけるのであつた。

五三、自由の權

奈良、猿澤池畔の龜佐の二階で、大川策次郎と藝妓花蝶とが、お膳を中に對座いて

ゐた。

花蝶は大川の持つて來た風呂敷包を解きながら、

「何ですよ大川さん、あア鶏卵だ」

「田舎の百姓から買ひ集めて來たんだから此邊の鶏卵とは二倍がけの精分がある、一つ割つて呉れんか」

花蝶は手を叩いて皿と醤油を取り寄せ、

「随分澤山あるわね、五ツ、十、十五、三十五あるわね、丹波市で買つて？」

「態々帯解けへ下りて二三時間も費つて買ひ集めたのだ、好い鶏卵だらう」

「實が濃いやうだわね」

一つ割つて渡す、大川はそれを啜ると、

「お前には恁ういふ土産がある」

懷中から百圓札の大束を取り出し、

「さ、一文も値切らんど、百圓札が五十枚で五千圓だ、これだけ渡せば厭は云へま
い」

「あら」

花蝶は思はず眉を寄せて、

「私、困るわ」

「何が困るんだ、二千圓の借金さへ拂わば落籍の出来るものを、五千圓でなくツち
や厭だといふから五千圓持つこ來たんだ、今更厭は云はせんぞ」

「だつて私……」

花蝶は顰められるだけ眉を顰めて、

「困つたわね、私、冗談に云つたんだもの」

「何が冗談だ」

「貴方に落籍されることを」

「お前の方で冗談でも此方は本氣だ、今になつて爾那ことは云はさん、それで借金
を拂つて綺麗に足を洗つて呉れ、明日の中には東京へ連れて歸る」

花蝶は全く困つたといふ顔で、

「誰にもまだ相談しちやないんだもの」

「それは云はせん、落籍するから親兄妹に相談して置けと云つたのは殆んど三十日

も前ぢやないか、今になつて相談もしないといふ辨解は聞はん咄だ、何と云つても明日は連れて歸る」

「ぢや、二十日も待つて下さいよ」

「二十日も待つてるか」

「十日でも好いわ」

「可かんく」

「五日」

「一日も待つてん」

「爾那無理云つたつて駄目よ、私が厭だつて云へばそれまでよ」

「ぢや、今まで私を釣つて居たのか」

「釣つたんぢやないわ、商賣なもの、招聘が來れば何處へだつて出るわ」

「花蝶」

大川は眼色を變れて、

「貴様は………」

「私が何うかして？」

花蝶は臆面もなく大川を見返し、

「一度だつて肌身を許した仲ぢやなし、落藉されやうと落藉されまいと私の自由の

權よ、野暮ツたいこといふものぢやないよ」

「何ッ」

大川は突如掴みかゝつた。

「何をするのよ、此人は」

花蝶は手を拂つて、

「お前さんのことは横山さんから聞いて知つてゐるわよ、憚りながら花蝶はね、天理教を食ひ物に仕損なつて、脅喝したり恩を仇で返すやうな人間の家内にはならないの

さ、恁う見わたつて花蝶さんは天理教の信者だよ、ふん、憚りさまさ」
横を向いて昂然とした、大川は有合ふ白鳥を逆手に持つて、花蝶の眉間を骨も砕け
と打ちかけた、間髪を容れず、

「待て大川」

大川の利き腕を無手と把つたものがあつた。

五四、鶏卵の礫

「待てッ」

云つて大川の利き腕を把つたのは仇地零之進であつた。大川は見て、

「おう、仇地さんか」

「仇地さんかもないもんぢや、おい、馬鹿にするなよ馬鹿に」

「わッ、誰が誰を馬鹿に」

大川は顔色を變ねながら呆けた調子で云つた、元の座に直つて仇地と花蝶を半々に
見比べる。

花蝶は澄し切つて糞を吹かしてゐる。仇地は鶏卵の側に座つて、

「大川君、何にも云はんから五千十圓九十五錢戻して呉れ、其代り此軸物を返す」
云つて、持つて來た軸物を前に置いた。

「九十五錢とは何です」

「九十五錢は丹波市から櫻井までの往復汽車賃と、丹波市から奈良までの往復汽車
賃とそれから車賃ぢや」

「馬鹿な」

「返さんといふのか」

「返す理由がない」

「理由がないッ、おい、大川」

仇地は猛威高になつて、

「貴様は詐欺師か」

「何方が詐欺師だ」

「貴様は恩を忘れたな」

「お手許拜見だ」

「私が何時恩を忘れた」

「先祖から忘れ通しぢやないか」

「貴様は三島へ来た當時、私の處へ何と云つて来た、天理教の内部へ入つたから屹度地所で儲けさせます、濟まないが百圓貸して下さいと鬨へ額を付けたぢやないか」

「其代り利子まで付けて取り上げたらう、恩を施したのは此方だ、坪一圓の荒地を百二十圓に賣つてやつたのは私が三島に居たからだ」

「口錢を取つたぢやないか、貴様のやうにな、大恩人の松室を引ッ張らせるやう

な人面獸心とは違ふわい、罪もないものを罪のあるやうに云ひくるめて、松室を監獄へ入れただけでも貴様は悪黨の証據ぢや」

「面白い、入れてやれと云つたのは誰ぢや、現在爾いふ仇地某ぢやないか」

「乗せてやつたのぢや」

「誰が貴様らの手に乗るか、天理教に助けられ、天理教で腹を肥しながら、天理教の悪口ばかり吐いて鑑一文も寄附をせんやうな吝嗇坊とは些とばかり異ふのだ」

「貴様のやうに隠謀を抱いて天理教へ入り込んだ、曲者よりは寧ぢや」

「爾思つたら腹も立つまい、はゝゝゝ」

「おい、要らんこと云はずと金を戻せ五千十圓九十五錢返せ」

「返せ因縁がない」

「因縁がないツ、貴様は賈物を掴ませて五千十圓九十五錢詐欺する意か」

「詐欺ぢやない、品物を賣買した、當然の金だ」

「十圓にも足らん贖物を五千十圓九十五錢に賣つて其れで詐欺でないか」
「探幽の眞物を多寡が五千圓で手に入れやうといふのからして慾の皮が突ツ張り過ぎてるわ、馬鹿な、はゝゝゝ」

「うぬッ」

仇地は側にある鶏卵を取るより早く、大川の顔を狙つて發矢と投げ付けた、狙ひはたがはず大川の鼻柱に命中で、殻が割れて白味と黄味がごろつと流れた。續いて一つまた一つ、見る間に鶏卵の礫が雨の如く飛んだ。

「此野郎」

大川は白鳥を逆手に飛鳥の如く飛びかゝつた。

五五、二人共警察へ

飛びかゝつた大川は突如仇地の額を投げ付けた、白鳥が欲げて飛ぶと仇地の額から血

が泉のやうに吹き出した。

「殴つたなッ」

仇地は掌の傷口を押わけて倍と睨め付ける間に大川はまた白鳥で殴つた、一方の顔は鶏卵の黄味だらけ、一方は血塗りになりながら息を喘ませて睨み合つた。

「此畜生」

呼吸を計つたが仇地は不意に大川の足を掬つた、撞と尻餅を搗く處を見事に馬乗になつて、有合せた杯洗で大川を滅多矢鱈と殴り付ける。

「痛いッ」

「當然だ、詐欺師め、騙者め」

杯洗が割れて飛ぶまで殴つた、大川は目と云はず鼻と云はず、顔中を白味と黄味と血に染めてゐる。

「殴つたな、此野郎」

「殴つたが何うした、詐欺師、金を返せ」

「糞でも喰わ」

「何をツ」

また組み付く、上となり下となり、殴る、蹴る、罵る、血に塗れながら二人は争つた。

花蝶は澄し込んで側に見て居た、一方は仇地、一方は大川、双方とも天理教信者に取つては去ほご有難い人達ではなかつた、毒を制するに毒を以てす、神様の思召かも知れない位に思つて平氣で見物して居た。

餘り騒々しいので階下から仲居が駆け上つた、血まみれの二人が死力を出して戦ふのを見ると、仲居は腰を抜かさんばかりに驚いた、そして聲を限りに叫んだ。

「板場はん、大將來とくれやす、大變や、大變や、人殺しや」

聲は猿澤の池の畔へも聞わた、池の畔の柳の下を二名の警官が巡回してゐた。

「おい、人殺しといふせ」

「人殺しだ、行け」

二人の警官はサーベルを握つて駆け付けた、果して血まみれ騒ぎであつた。

「こらッ」

「放さんか」

警官は力を併せて二人を引き放した。

「何をするかッ」

頭から叱り付けられて仇地は血を拭き、

「警官、私に罪はありません、此奴が五千十圓九十五錢騙りやがつたのです、詐欺師です、大泥棒です」

「警官」

大川がまた黄味の血を拭き、

「此野郎は名代の因碍者です、三島の仇地と云つたら貴郎方も御承知でせう、佛法の提婆見たいな奴です、此奴の云ふことを信用なすつては大間違ひの因ですぞ」

「警官、三島の松室を密告したのは此奴です、脅喝で入獄れた腹癒に罪もない松室を引ッ張らせたのです、偽証罪か何かで監獄へ打ち込んで下さい」

「警官、恩を仇で返す奴は此奴です、天理教のお蔭で生きて居ながら五十錢坪を五六百圓坪に賣り付けやうと企んでる奴ですからな、詐欺師とは此奴のことです」

「黙れッ」

と、警官が一喝した、そして、二人の警官が二人の肩先を掴みながら、

「二人とも警察へ来い」

「私ですか」

「私ですか」

仇地と大川が前後して云つた、警官は睨め付け、

「二人と云へば二人ぢや、立てッ」

二人共警察へ引かれるのであつた、後で花蝶は吻として云つた。

「あア、漸と助かつた、天理様と横山さんのお蔭だわよ」

五六、武子の大怪我

仇地を出た武子は丹波市から汽車に乗つた、大阪の湊町驛へ戻つたのは其日の日没前であつた。

驛前で俥に乗つて、堀江の通路を四ツ橋の方へ走らせながら、

「我家へ歸らないで此足で本町橋へ廻らうか知ら、いくら何でも最う京都から戻つてらだら、仇地の咄をしたら何那に驚くか知れない、巧く英子が死んで居て呉れると春江を離縁するのは譯はないんだが、死んで居なくつても仇地の咄を聞かせたら身の毛を立てるだらう、天理教は香具師だ、狐憑を使つて百姓から山や田地を巻き上げる

……寒さんは巧いことをいふ、其通り些とも違やしない、仇地は今では何百萬の身代か底が知れない、庄屋敷の仇地と云へば地所持ではあつた、けれど、多寡が田舎の百姓だ、知れたものであつた、それを今の身代にしたのだから寒さんは働き者である、鳥渡軸物の賣買でも一萬圓も儲けやうといふのだから偉い、今頃は一萬圓の儲金を懐中に入れて晩酌でも飲んでるだらう、慾は深い金が溜める慾だから頼母しい、我家らの保とは段が異ふ、使ふことばかり知つて儲けることを知らない、加之に嫁が天理さんで保も天理さんに成りかけてゐる、天理さんに狐を使はれて岩佐の身代を巻き上げられでもしたらそれこそ大事だ、照子の嫁入は出来ぬわ、私は寄る年浪だわ、忽ち路頭に迷はなげやならない、思つたつて慄然とする、是が非でも春江を離縁て我家から天理さんを追ひ出さなくツちや、第一御先祖へ對して申譯が立たない」

俵は四橋にかゝつた。

「車夫さん」

「へい」

「本町橋の方へ廻つて貰ひたいんだがね」

「へい、宜しうございます」

「待つてお呉れよ」

「へい」

「英が死んで居れば本町は後でも好いのだし」

「何ういたしませう」

車夫は轆棒を控えて立つた。下繫橋の方から一臺の自動車が馳つて来た、警戒の喇叭を切と鳴らせた。

車夫は線路の方へ避けて、

「何ういたしませう」

と訊いた同時に北行の電車が警鈴を鳴らせながらやつて来た、車夫が線路を横切ら

うとした刹那に、

「危険い、馬鹿ッ」

噛み付くやうに叱る運轉手の聲と、力一杯ブレーキをかける音と、風の如く馳つて来た南行電車が武子の乗った車に衝突したのが殆んど同時であつた。

あなや、と思ふ間に轟然たる音と共に俾が線路の外へ二三間も跳ね飛ばされた、車夫は轆棒を握つたまゝ横投げに投げ付けられ、車臺は碎け、轍は歪んで居る、而も車上には誰も居なかつた。

「客は何うした、客は」

逸早く飛び下りた運轉手が、四邊を眺しながら叫んだ、唯見ると三四間も向ふの電柱の根に、今にも呼吸を引き取りさうな聲で呻吟いてゐる女があつた、それが武子であつた。

「あれだく」

運轉手が先づ駆け付ける。

五七、茶屋の女將か

武子は電柱の根許に俯伏してゐる、車上から跳ね飛ばされた機みに、電信柱へ額の半面を衝ち突けたと見わた、右の頬骨は碎け、鼻は潰され、唇は上下共に斬れて居る、齒も二三本折れてゐた、口からも鼻からも血が滾々と流れて俯伏した地上が血糊で唐紅に染まつて居る。

「そら衝突だ」

「人が轢かれた」

「死人がある」

「電車に轢かれたんだ」

「そら行け」

「わーッ」

彌次馬が四方八方から集つた、巡査が駆け付けける、車掌が走る、監督が来る、橋の上で電車が行列して彌次馬が真黒く群つた。

武子はウーン／＼呻吟いてゐる、吐く息、引く息の度に斬れた上唇が辨のやうに顫れた。

「何處の婆さんだらう」

「婆さんぢやない、まだ若いぞ」

「扮装は上等ぢやないか、茶屋の女將か」

「仲居だらう」

「いや娼妓だ」

「圓鬚の娼妓があるか」

「そこがハイカラよ」

群集が掻き笑つた、監督は車掌と運轉手を指揮して武子を擔ぎ上げさせた。

「井上病院、井上病院」

「まだ近い處にお醫者があります」

「病院が慥かだ」

武子は井上病院へ運ばれた、群集は雪崩を打つて後を尾けた。

車夫は幸ひに怪我をしなかつた、けれど泣きさうな顔で壊れた俵を片寄せて居た。

「こら、貴様は何處の部内ぢや」

巡査が叱るやうに呼びかけて手帳を披いた。

「へい、へい」

小腰を曲めながら住所姓名を申立てた。巡査は一々手帳に書き留め、

「お客は何處の者ぢや」

「へい、何處の人でございますか、船場までといふ約束で乗つて貰ひましたので、

中途から本町橋へ廻つて呉れども云つて居られました」

「何屋の者ども分らんか」

「皆目分りません」

詮方なしに巡査は井上病院へ走つた、けれど武子は口の利けさうな軽い怪我人ではなかつた。

「本署へ報告したいのですが」

巡査がいふ、院長は武子の傷を調べながら、

「名を聞きたいのですか」

「はア」

「御覧の通りの怪我人で口が利けるものですか、これに餘病を發したら迎も助かる患者ぢやありません」

「爾那重傷ですか」

院長は黙つて手當にかゝつた。

遂に武子の何者かを知る由がなかつた。

五八、天理子さん

「阿母さんは何を愚圖々々してるんだらう」

岩佐家では照子がぶつく云つてゐた。

「最う電燈が點くわ、丹波市へなぞ行かなくツても好いものを、暗くなつたら何うするんだらう」

離座敷の椽に腰を掛けて、兩足をぶら／＼動かしながら暮れ行く庭を見てゐた。お竹が出て来て、

「お嬢様、御隠居様は何方へお越しになりましたのでございますか」

「それを訊いて何うする意？」

照子は意地悪さうな眼許で訊き返した。

「何うする譯でもございませぬが、奥様が大層御心配遊ばして被居いますから、それでお訊ねするのでございます」

「爾、心配してゐて？」

其筈だ、と云ひさうな顔をする。

「はい、何だか、胸騒ぎがして仕方がないんださうでございませぬよ」

「爾、妙なもののね、虫が知らせるのか知ら」

「何をでございますか」

「何でも可いわよ」

叱るやうに云つて両足を絶えずぶん／＼させてゐる。

「ねねお嬢様、何方へお越しになりましたのでございますか」

「何處だつて可いちやないの、執拗いね」

「はい」

「阿母さんだつて足があるから何處へだつて行くわ」

「悪いこと申しました」

「當然よ」

睨まれてお竹は狐鼠々と母屋の方へ往つた。照子は感心して、

「嫂さんに虫が知らせるんだわ、不思議なものね、爾して見ると人間には暗示があるものよ、丹波市の方が成功して彼の娘さんを連れて来るのか知ら、來たら私嫂さんと呼んで與げやうか、それも笑止いわ、嫂さんが同時に二人あつて、這度來る人を嫂さんと呼んで、今の嫂さんを春江さんと呼んでやらう、いや、天理さんと呼んでやらう、あア其れが可いわ、あの天理子さん、ほ／＼／＼」

少時するとまた母のことが氣になつた。

「奈良へ廻つて遊んでるのか知ら、今晚は仇地で泊るのかも知れない、あア爾かも

知れない……歸つて來たら可いのにね、彼の娘を連れて、でなかつたら、横山さんが來ると可い、阿兄さんも嫂さんも英子に附きツ切で、私一人面白くも何ともありやしない」

八ツ手の葉を贖めて、

「横山さん何故來ないんだらう、阿兄さんと喧嘩したのか知ら、私、何時横山の家内になるのだらう、此夏か知ら、秋か知ら、夏でも秋でも介はない、今年の中だつたら……結婚ツて何那ものか知ら、阿兄さんと嫂さんのやうにお杯するのか知ら、厭だわね、私羞かしいわ」

照子は思はず俯向いた、嬉しい羞かしいといふ舉動であつた。

やがて、其處に居溜らぬとでもいふやうに、表の方へぱたく走り出た、そして、

格子の中から往來を眺める。

鈴の音が聞えて新聞配達が走つて來た。

「夕刊」

入口から庭へ放り込んで往つた、照子は拾ひ上げて格子の側で廣げて見る。見る間に、

「あら、天理教が大變よ」

と云つた。電燈がぱつと點つた。

五九、役員 の 檢 舉

照子が見てゐる夕刊には恚んなことが出て居た。

●天理教役員 の 檢 舉

松室權大教正の拘引

△△△日奈良地方裁判所の大月豫審判事、高井檢事正等は丹波市大字三島の天理教本

部に出張同教本部事務所、故△△△△、松室權大教正、梶山成太郎等の家宅搜索を爲し同教の實權を握れる權大教正松室芳郎(五十)に令狀を執行して奈良監獄に收監し直に奈良地方裁判所豫審庭に引出され徹宵取調を受けたり(奈良電話)

▲帳簿の押収

松室權大教正拘引事件の理由は天理教本部にても其の何事なるやを知らず當日出張の判檢事は明治四十年より大正三年に渡る帳簿を押収し△△△夫人中谷民江子(三十)は對しては家庭上の訊問をなし梶山成太郎(四十)に對しては松室との關係を訊問して書類の搜索をなしたり

▲拘引の理由

松室權大教正の拘引されたる理由に就き本社探知する處に依れば元松室教會にありし大川策次郎(七十)が告發したるものにして奈良市の某が教祖の木像を所有せるより大川は之れを本部へ五萬圓にて賣渡さんとしたるも其木

像は賈物なりといふものありて交渉纏まらず大に業を煮やし居たる折柄本部の獨立運動に參與したりと稱し莫大の報酬を強請して脅喝罪に問はれ入獄したるを怨みに思ひ當時の請願委員たる松室本部長が某政黨に三十萬圓某大官に五萬圓を贈りたりこの説を流布し其筋に密告したるものにして松室氏は之れが犠牲に擧げられたる形なり

▲古賀局長の談

右に就き當時の警保局長たる古賀廉造氏を小石川の自邸に訪ひたるに氏は曰く同教が獨立して新に宗教として公認されし經過は自分が局長たりし當時即ち明治四十一年中天理教徒が獨立の願書を内務省の宗教局に提出したるものを警保局に廻附されたれば全國の警察に對して該教が果して願書の如く宗教として世道人心を支配し風教を維持するや否を嚴密に内偵せしめし結果新瀉の一部を除く外大部分は宗教としての價値ありその報告を接受したれば其の趣を宗教局に

復命したり然るに他方に於て同宗徒間に運動を開始する模様ありしより左の三箇條を發して大に戒めたることあり

第一條 願書に對する審査中運動がましき行爲を絶對に禁止す

第二條 運動の名義の下に各方面の關係者に金錢を撒布すべからず

第三條 願書の内容を配布して各方面の信者を奮起せしめず努めて宗教の公認運動を斷念せしむること

而して該宗教の公認されしは四十一年の七月中内閣瓦解後にして

▲新内閣組織

されて平田内相の時に公認されしものと記憶し居れり、然し今

回の事件は公認當時の運動に關する醜行爲にはあらずして何か他の事件が其の當時より胚胎し來りしもの遂に今日勃發せしにはあらざるか若し宗教公認の際に於る醜運動として今日己に控訴期間を経過し居れば檢事が新しく迄熱中すべき必要ならん、又出願中にありても某方面の者より平田内相に二千圓其の他にも多額の金錢を贈りたりなごゝか密告せる者ありしが何れも事を構へし者の中傷なること判

明せり云々(東京電話)

「まあ、天理教は大變だわね」

云つて電燈を睨と噴めた。

六〇、病院から電話

夜に入つても武子は戻らなかつた。病間では春江と保が英子の枕許で心配の顔を見合つた。

「ねね良人、阿姑さん何うなすつたのでせう」

「お竹の咄ちや照子が知つてるといふぢやないか」

「照子さんが知つて被居たつて心配ですわ、今日まで恁那に遅くまで出歩いて被居ることはないんですもの」

「親戚へでも行つてらんだらう」

「だらう位くらゐで放はなつちや置おけませんわ、私わたし、照子てるこさんに聞きいてお迎むかひに行いつて参まゐります」

「お前まへが迎むかひに行いつたら餘計よけい歸かへつて來こないだらうせ」

「爾那そなたに私わたしは嫌きらはれて居ゐるんでせうか」

「嫌きらはれて居ゐるらしいな、はゝゝゝ」

春江はるえはほろりとしたが、

「私わたしの仕つかわやうが足たりないからですわ」

「仕つかわ方が足たりないんぢやない、天理てんりさんが嫌きらひなのだ」

「何故なにお道みちがお嫌きらひなのでせうねわ」

「誤解ごかいしてゐるんだよ、天理てんり教けうを信しんずると家いえが潰つぶれると思おもつてゐるのだ」

「家いえが榮さかんで行ゆきますわ」

「お前まへの實家じつけが悪わるいんだよ、別莊べつそうから有金ありがねを全ぜん部ぶ本ほん部ぶへ寄進きしんするものだから、それ

を何い時つも例れいに取とるのだ、何故なにまた全ぜん部ぶ寄進きしんしたのだらう」

「皆みな埃ほこりの金かねですもの」

「料理屋れうりやで溜ためた金かねだからか」

「藝者げいしやに身みを賣うらせては其間そのあいだの口錢こうせんを取とつたり、血汗ちあせで稼かせぎ溜ためたお客きやく様さまのお金かねを湯水ゆみづのやうに使つかはせたり、十錢せんぜん位くらゐな小鉢物こぼちものでも二十錢にじゅうせんも三十錢さんじゅうせんも戴いたいたり、皆みな埃ほこりの金かねですわ、その事ことを實母じつははが毎日まいにちのやうに苦くに病やんでましたの、病氣びやうきが何い時つも其事そのことからですもの、阿兄あにが信者しんじやになるのを待まちち兼ねて、相談さうだんの上うへで本部ほんぶへ差さ上げたのですわ」

「聞きいて見みりや道理道理の咄はなしだね、阿母ははは其事そのことを知らしないからね」

「些ちとも無む理りぢやございませんわ」

間まを經かいて、

「ねね良人あな」

「何なんだい」

「私爾思ひますのよ」

「何う思ふツて」

「英が病氣なのは、阿姑様への仕方が足りないから、其れを懺悔せよと神様がお知らせ下さるのだと存じますわ」

「英の病氣がかい」

「はア」

「英の病氣は僕が治して見せる、僕の精神だけでも神様が殺しはなさない」
保は大に力んで見せた、春江は微かに笑つて、

「良人見たいなこと云つたつて駄目よ、それちや神様のお袖に縋るのぢやなくツて
良人の力で治さうと思つて被居るのですわ」

「僕の方、すなはち神の方だ」

「埃よ」

「これが埃かい」

「はア」

「困つたな」

頭を搔いて、

「ぢや、何うすれば好いのだ」

「御自身で考へて御覽なさいよ」

「諾、考へる」

保は腕を拱いた。其處へ照子がばた／＼と駈けて来て、

「阿兄さん、阿兄さん、大變よ、大變よ、阿母さんが電車に轢かれたんですツて、

阿母さんが電車に、私、私何うしやう………」

杖を顔に當てながら地團太を踏んで泣き出した。

六一、 姑をお助け下さい

「阿母さんが電車で轢かれた」

「照子さん、阿姑さんが電車で」

保も春江も顔色を眞蒼くした。照子は泣きながら、

「四ツ橋で、電車で轢かれて、堀江の井上病院に、今、病院から、電話が……」

私、私何うしやう、何うしやう」

また地團太を踏み出した。

保は立ち上つて、

「春江、帽子だ、羽織だ、竹、俵を呼んで来い」

春江は何やら念じてゐたが、

「良人、私も参りますわ」

「お前も来て英を何うするのだ」

「竹が居ますわ」

「竹一人に任して置けるか」

「神様が守護つて居て下さいますわ」

夫婦で仕度にかゝつた、お竹は俵を呼びに走り、照子は唯鳥鷺々々してゐた。

「照さんも参りませう」

春江が云ふ、照子は濡れた顔を横に掉つた。

保と春江が出て行つた後も、照子は唯鳥鷺々々しながら泣いた、お竹は英子の側を放れなかつた。

二時間も経つたと思ふ頃、病院から電話がかゝつた、保からである。

「誰だ、竹か」

「はい、竹でございます」

電話の鈴を聞き兼ねてお竹が出たのであつた。

「阿母さんを連れて往くから座敷へ床を延べて置け」

それだけであつた、お竹は床を延べて待つた、間もなく武子が擔架に載つて戻つて来た、春江の眼は赤く泣き腫れて居た。夜中の一時過である。

附き添ふて来た病院の醫員が色々注意を與へて置いて、保夫婦の止めるのも聞かす俥で歸つた。お竹もお杉も交々見舞に來た、照子は春江の脊後から怖さうに覗いて見て居たが、死んで居なかつたので最う泣かなかつた、そして、殆んど隙目もなく繃帯で包まれた母親の首が、狼の遠吠のやうに呻吟き出すと照子は身を縮かめて北げ出した。柱時計が二時を打つた頃には、照子は最う自分の部屋の寢床の中にすやくと眠つてゐた。

三時前に保が英子の側へ床を延べて眠つた、お竹やお杉は夜中の夢であつた。

春江は一睡もせず武子の枕邊に附き切つて、氷嚢を武子の頭へ萬遍なく當てがつ

た、一分一秒も手を緩めなかつた。

手を動かしながらも、春江は心の裡で懸命に神様に祈つた。

「阿姑様をお助け下さいませ、阿姑様をお助け下さいませ」

手は棒のやうに痺れ、眼は引釣るほど疲れた、けれど春江は一寸も止めなかつた。

四時過に英子が火の附いたやうに泣き出した、保は寢込んでゐると見えて起きさうになかつた、英子は段々強く泣いた、春江は膝を怩怩させたが、遂に立ち上らうとしなかつた。英子は今にも息が詰りさうに泣いた。氷嚢を持った春江の手は流石に顫わた、けれど心で懸命に祈つた。

「阿姑様をお助け下さいませ、阿姑様をお助け下さいませ、天理王命様々々」

六二、まごころ

廁へ行く時の外、春江は一分間も武子の側を離れなかつた。

「奥様、お代り申しませう」

翌朝お竹が代らうとした。春江は頭を掉つて、

「好いから、私にさせてお呉れ」

「でも、奥様は徹夜を遊ばしたのですもの、鳥渡の間でもお眠み遊ばせ」

「些ども眠くはありません」

お竹も手が出せなかつた。晝過ぎに保が出て来て、

「おい、御飯を食はなくツちや可かんぢやないか」

と云つた、春江は武子に薬を含ませながら、

「だつて、欲しくないのですもの」

「欲しくないと云つて、朝も食はず晝も食はないで軀が持つか」

「だつて、何ともございませんわ」

「今何ともなくツても後で悪くなる」

「良人、後生だから私の思ふやうにさせて下さい」
保も重ねては云はなかつた。

春江は殆んど食はず飲まず、眠らずの業であつた。

照子は思ひ出したやうに出て来ては枕許に陣取つた、かと思ふと突と立つて行つた

五分と沈として居なかつた。

午後の二時頃から武子は全く呻吟がなくなつた、春江はお蔭を悦んだ。

三時前に武子は口をもがくさせた。

春江は何か欲しいのだらうと思つた。

「阿姑様、何か差與げませうか」

耳元に口を寄せて云つた、優しい聲であつた。

武子は熱に浮かされて、

「天理さんはお断りだよ、離縁のだから、男らしくもない、春江くらゐな女、あア
苦しい」

片々に嚙言を云つた。聞く間に春江の頭は知らず識らず俛向いた、片袖が自と眼を押せる。

けれど是れしきなことで春江の信念は崩れなかつた、至誠の届くまで、神様がお助け下さるまで、阿姑の側は離れんと決心した。

島本博士が来た、井上病院の手を放れて出入の博士にかゝつたのであつた。

「餘病さへ發しなかつたら大丈夫ですが、何方かと云ふと起したがる傷です、併し奥さん」

春江を噴めて、

「阿姑さんよりお嬢様の方が油断がなりませんぞ、昨日より反て重くなつてゐる」
春江は唇を噛んで泳いでゐる。

「阿姑さんの方は誰でも熱心にさへ看護なさつたら好いのだが、お嬢様の方は何うしても阿母さんの貴方ではなくツちや呼吸が分らない」

春江は僅かに頷くばかりであつた。

「お大事に」

「博士は去つた、春江は依然として武子の側を離れなかつた。武子の便通は皆春江の手で始末された。

八時頃から武子の熱が薄紙を剥がすやうに退いて来た。

「水、水」

と云つた。

「はい」

春江は悦んで湯呑の水を含ませた、心持で神に供けた御水である。春江も一ト口戴いた。武子は、

「誰？、其處に居るのは」

と云つた、春江は「照さんです」と云はふと思つたが、それでは偽るのだと思つて

「春でございます」

と云つた。武子はそれ切口を利かなかつた。春江は懸命に看護した。十一時頃に武子がまた口を開けた。

「誰だね、其處に居るのは」

春江は細い聲で、

「春でございますの」

武子は直ぐに口を噤んだ、夜半の二時頃にまた水を呉れと云つた、春江はまた御水を含ませた。

「誰だね水を呉れてるのは」

訊かれても春江は黙つてゐた。すると、

「春さんか」

と云つた、春江は嬉しさに思はず顔を覗いて、

「阿姑さま、快くなつて下さいませよ」

と云つた。武子は噤と口を閉ぢた。

「阿姑さま」

呼んでも返事もしなかつた。春江は氷嚢を當てながら、片手で密と眼を押わせた。

六三、呼吸ある間に

三時前に武子は、

「何か食べさせてお呉れ」

と云ひ出した、春江は悦んで重湯と肉汁を飲ませた、乳豆を口に啜りて武子は有りたけ飲んで了つた。

三時過ぎに英子の病間が騒がしくなり出した。

「竹、竹、竹」

保が切と呼ぶ、お竹が漸と目を覺したらしい、間もなく、お竹の泣き聲が聞えた。春江は太胸を突いた、手足が自づと顫れ出す。

果してお竹が飛んで来た。

「奥様々々、お嬢様が早く、早く」

口も充分利けなかつた、春江は唇を噛んで神の名を呼んだ。心の中で、

「阿姑様を、先づ阿姑様を、お助け遊ばして………天理王命さま」
顫る手で萬遍もなく武子の頭に當てた。

「お、奥様、貴方は、あなたは」

お竹は泣きながら春江を怨んだ、春江は戦々と顫ながらも阿姑のお助けを願ふてゐた。

お竹は口惜しさうに泣いて去つた、保の泣き聲まで聞えた。春江は裂けよと唇を噛んだ、氷囊持つ手は緩めなかつた。

お竹が戶外へ走つた、醫春を呼びに行つたのであらう。

「水を、水を」

武子が云つた、春江は悦んで御水を含ませた。

夜は仄々と明けかけた頃、島本博士が搔卷姿で駈け付けた、注射をして往つたらしい。

「英や、英子や」

保の呼び立てる聲が春江の心臓を剗つた、春江は懸命に阿姑のお助けを祈り續けた。其日の朝も食はず晝も食はず、春江は御水だけ戴いて武子の看病を續けた。午後二時頃洋服姿の島本博士が來たらしい。英子の方を先に見舞つて次に武子の方へ入つて來た。枕許の春江を見ると意外な顔で、何か云ひかけて口を噤んだ。

武子の手を握ると一層意外の眼を睜つた。

「これは、驚いた」

武子を覗き込んで、

「奥さん何うです、気分が全然快くなつたざやありませんか」

博士は、武子も奥さん春江も奥さんと呼んだ、武子は明瞭した聲で、

「先生でございますか、お蔭様で大變快くなりました」

「驚いたな何うも、全く奇蹟だ」

博士は全く驚いて、

「奥さん、意外ですな何うも、恁那ことは四十年以來ないことだ、痛みも止まつた
でせう」

「大變樂になりました」

「いや、何うも驚いた」

鼻眼鏡越しに春江の顔を孔の穿くほど覗いて、

「奥さんは魔法使ひだ」

春江は心底から嬉しく、

「先生、阿姑は宜しい方でございますか」

「御覽の通りです、最う大丈夫、御安心……………なさいと云ひたいが」

聲を低めて、

「お嬢様の方はお氣の毒です」

「駄目でございますか」

「貴方の、此お手際で行つて戴くより外に、最う手の盡しやうがない」

春江は込み上げる涙を唇で噛み止めた。博士は穩かに、

「お嬢さんの呼吸ある間に一ト目でもお逢ひなすつたら何うです、阿姑さんの方は
私が引き受けます」

「はい……………」

浮と口を開いた機みに、泳に涙が一度に堰き上げた。隠れるやうにして春江は英子

の側く走つた。

六四、遅い汽車

二日見ぬ間に英子の容貌が全然變つて居た、林檎のやうに紅く熟れた頬は、今昔と變り果て、顔も手足も骨と皮であつた、而も其顔は二夕目と見られなかつた、窪んだ眼は白く引き釣つて、乳齒が下唇を裂けよと噛んでゐる、手も足も引き付けてゐた。

「英や、英や、英よ………」

春江は力一杯抱き締めて呼んだ、涙がぼたく頬を流れた。

「阿母ちやんだよ、英や、分らないのかい、阿母ちやんが………」

また泣いた。保は拱ぬいた腕を解いては眼を古摺つた。お竹は病床の裾の方で疊に喰ひ付いて泣いてゐる。

「英や一ト目見てお呉れ、お前の阿母ちやんだよ、お前の………今までに來たくツて、來たくツて、來たくツて」

聲を揚げて泣く。

返事こそせぬが、英子はまだ息をしてゐた、びく／＼と手足を顫はせる度に、乳齒が唇の肉を喰ひ込んだ、親の目には二夕目と見られぬ慘目さであつた。

春江は英子を床に寝かせて、元のやうに氷嚢を額に載せてやつた。

「良人」

保の方へ向いて、

「お詣りさせて下さいまし、見て居れませんもの、可哀想で、涙を拭く。保も同じ思ひであつた。

「助けて貰つて來て呉れ、僕も祈る」

云つて眼を古摺つた。お竹が泣き腫れた眼で氷を取り替へる。

春江は急いで衣物を着替けた。

「英や」

出がけに英子の顔を覗いて、

「阿母ちやんがお詣りして来る間、憊うして居てお呉れよ」

これが見納めになるのではないかと思ふと、涙がまたしても雨のやうに落ちた。

「行くなら早く行つて早く戻れ」

保の聲に春江は立ち上つた、二度まで氷嚢を載せ替けてやつて、それから急いで我家を出た。

最初、船塲教會へお詣りする氣であつた、中途から本部へお詣りする氣になつて、春江は南行の電車に乗つた、俾より早いと思つたら。

上本町六丁目で奈良行電車に乗り替けて、驛前で下りて池の端を奈良驛の方へ急いだ。

驛へ着くと王子行は今出た處であつた、一時間待たなければならなかつた、其間の待ち遠いこと。五分、十分の待つ間が、平日の一時間も二時間も待つやうな氣がしたやがて待ち兼ねた王子行の札が出た、誰よりも一番に鉄を入れて貰つて、改札口をプラットへ出て一番に王子行の汽車に乗つた、乗つてかまた發車までの氣の長さ。

小半日も待つたやうに思つた頃、漸と汽車が動き出した、平日の汽車ではないかと思ふほど汽車の速度が鈍く思つた。

帯解で汽車が容易に出なかつた。

「何うしたのでございませう」

隣の人に訊いた。陸軍の將校らしい男が、

「積荷をしてゐるからです」

と云つた、窓から覗いて見ると、終尾の方の荷車へ仲仕が切と俵を運んでゐた、俵はまだ十五六もプラットに積んである。

「あれを皆載せるのか知ら」

思ふと春江は氣が氣でなかつた。仲仕は二人居た、二人が運んで一人が肩へ載せてやる、送状を持つた驛員が一人の仲仕に手を助けて、二人で俵を運ぶ人の肩へ載せてやつた。

「エンヤラホー、エンヤラホー」

見る／＼俵は減つて來た、五つが三つとなり、一つとなり、それが無くなると車掌が片手を水平に延べて合圖の笛を鳴らせた。

春江は吻として窓から首を引込めた。汽車は轟々と動き出した。

六五、英は死んだ

樫本の街道を村の子供が犬の死骸を運んでゐた。春江ははつと思つて身内を顫はせだ。丹波市の手前の畑で鳥が厭らしく鳴いてゐた、それが春江には自分の方ばかり見

てゐるやうに思はれた。

「英は死んだのか知ら」

思ふと胸が板のやうになつた、けれど直ぐに神の名を唱へた。

汽車が丹波市へ着くの待ち兼ねて、春江は誰よりも早く改札口を出た、それからは何處を何うして本部まで來たか少しも記憶がなかつた氣付いた時手洗鉢で手を清めてゐた。

禮拜殿へ上ると直ぐに神前に額叩いた。

「阿姑を助けて戴きました上に、英をもお助け下さいませとは申しませぬ、けれど助かりますものなら、何のやうな懺悔でもいたしてお詫びをいたします、若し、助かりませぬ……助かりませぬ因縁でございましたら、一刻も早く御引取り下さいませ、親の身として彼の苦しみを居れませぬ……」

神の御名を呼んで頭を擡げた、仰いで時計を見ると五時に五分前であつた。

歸途がまた易容でなかつた、汽車で奈良へ出て、奈良から軌道へ乗つて上本町から市内電車に乗り替けた、市電を下りてから岩佐家まで一町ばかりの道程であつた、我家の四五軒手前までは夢我夢中であつたが、四軒目邊から足が鉛のやうに重くなつた助かつてゐるか、死んでゐるか。

此二つの問題が春江の今の命であつた、氷嚢が吊してあれば英子は助けて貰つたのである、氷嚢が除つてあつたら、英子は、英子は……………。

「氷嚢が吊してごさいますやうに」

春江は思はず神様にお願ひした、其那約束でないことも忘れて。

春江は内へ入ると態と椽傳ひに病間を覗いた、死んで居るか助かつて居るか、氷嚢が吊してあるか除れて居るか、怖いものでも見るやうに障子の腰硝子から密と透して見た。氷嚢は吊してなかつた。

「あア、除れてゐる」

春江は思はず其處に平太張つて了つた、力も精も抜けて了つたのである。

障子の内には親戚の人から近處の方が七八人來合せてゐた、保も居る、お竹も居る加之に京都の實家の母親まで來合せてゐた、其れらの人の眼は皆赤く泣き腫れてゐた

「英子は死んだのだ、英は死んだ……………」

春江は椽に俯伏して了つた。

「春さんぢやないか」

實家の母が誰よりも先に氣付いて出て來た、俯伏した春江を見ると、母親は最う聲を揚げて泣き出した。

「英は死にました」

母親がまた泣いた、春江も聲を揚げて泣いた。

六六、五時五分钟前

實家の母を松子と云つた。お席まで運んだ眞の信者である。

「何時まで泣いて居たつて仕方がない、せめて英の死顔でも見てお遣り」

云つて春江の手を把る、把られたまゝ春江は英子の側へ行つた、逆屏風の蔭に英子が寝かせてある、松子は顔の白布を脱つて見せた、英子は眠つてゐるやうに安らかに眼を瞑つて居た。

「英……………」

春江は犇と抱き締めた。松子、保を初め、皆顔を反向けて泣いた。啜泣きの音が彼處にも此處にも聞える。

少時泣いてから春江が云つた。

「阿母さん、何時頃から來て被居て？、英の死目に遇つて下すつて？」

「わゝ、わゝ、遇ひましたよ、立派に遇ひましたよ」

松子は涙を拭いて、

「それがね春さん、皆神様のお引合せです、新聞にも出て居るやうに、本部員の松室さんが彼那災難にお遇ひなすつたものだから、せめて親族の者だけでも、松室さんが無罪になつて下さるやうに神様へお願いして貰ふと思つて、昨日は京都の親族から知人を、今日は大阪のお前たちから知合の方へお願いに廻らうと思つて、何の氣なしに此家へ來て見ると阿姑さんも大病、英も大病、私驚いて了つた、阿姑さんは大層快いやうだが英は引付けたまゝで、最う七分がた死んでゐる、大變だと思つておさづけをして見たが効がない、二時間もお蔭を願つたらうかね」

春江は半帕を顔に當てたまゝ聞いてゐる、

「それから、保さんにお神様の在所を聞いて、御水を供わて、一心にお祈りしてゐると、彼那に堅く引付けてゐた英が俄に笑ひ出すぢやないか」

「はい」

「保さんも不思議がつてね、阿母さん英が笑ひ出した、血色が非常に好くなつたと

被仰る」

「わい」

「私嬉しくて溜らないだらう、おう、英や、云つて抱き上げてても仍且嫣然莞爾笑つてゐる、可愛い目をして、まあ、何うしたのだらう此兒は、思つて居る間に」

松子は自づと沸き出る涙を押わて、

「思つてゐる間に、段々、段々冷たく……冷たくなつて了つたわー」

聲を揚げて泣き出した。啜泣の聲がまた部屋に満ちた。春江は俯伏してゐた。

「冷たくなり切つた時」

松子がやつと泣き止んで、

「時計が五時打つた、だから息を引き取つたのが五分前でもあつたらう」

聞いて春江は思はず顔を擡げた。

「五時五分前？」

「爾でしたね保さん」

松子は保の方に向いた、保は眼を閉ぢたまゝ頷いた。

「それでは、私が本部でお詣りしてゐた時刻よ、お祈を済まして時計を見た時、恰

ど五時五分前でしたもの」

「春江、神様のお蔭です」

松子が云つた、春江も、

「お蔭ですわ、神様のお蔭ですわ」

云ひく春江も松子も泣いた。

六七、武子の懺悔

神様のお蔭といふ詞が春江に阿姑の上を思はせた。そして、急いで武子の枕邊へ戻つて行つた。枕許には誰も居なかつた。

歩音を聞いて、

「春さんか」

と武子が云つた、春江は優しく、

「はい、春でございます、長いこと放つて置きました、済みません、何か差上げませうか阿姑さん」

それには答へずに、

「英子は、死んださうぢや喃」

何時にないしんみりした聲であつた。

「はい」

ほろりとしたが、直ぐに氣を替へて、

「仕方ございませんわ、其代も阿姑さん快くなつて下さいましね、阿姑さんが快くなつて下さつたら諦めも付きますわ」

「春さん」

武子は突如春江の手を握つた。縋帯を少し避けた方の眼から、涙をはいく零しながら、

「貴方は爾那に私のことを思つて下さるのか……許してお呉れ、許して、許して……」

「あら、阿姑さん」

「いゝね、私は鬼だつた、蛇だつた、恁那、恁那女がまたと世界に……」

「まあ阿姑さん、何うなすつたの、お傷に障ると可けませんわ」

云ひく春中を撫でゝある。

「私は春さん」

武子は起き上らうとして倒れた、そのまゝ春江の方を向いて、

「私は貴方の敵ぢや、英の爲めにも敵です、英の死ぬやうに、貴方を離縁やうに、

私は何れほどやきもきしたか知れない、貴方の居なさる間に嫁を連れて来る意で其嫁の詮索に行つた戻り途の怪我です、罰だったのだ、神罰が當つたのだ、それとも知らずに實子も及ばぬ介抱をして貰つた、私は辛い、穴へでも入りたい」

春江は両手を膝に俛向いて聞いてゐる。

「春さん、お蔭で私は心を洗つて貰つた、濁つた心を澄ませて貰つた、今日から改めて貴方の真似がしたい、天理さんの道を教わて下さい」

「わゝッ」

春江は思はず叫んだ、

「天理さんのお道を、あの、阿姑さんが」

「わゝゝ、お道が聞きたい、天理さんになりたい」

「まあ、私………」

春江は生れて是れほど嬉しい目に逢つたことは最初であつた、両手を結んで、神様

にお禮を申上げるより外爲すべき術がなかつた。

英子の野邊送りが濟んでから松子は十五日間武子の枕許でお道の話をして聞かせた武子の心が清く掃除されるに連れて、さしもの傷も全く癒わて了つた、潰れた鼻、歪んだ口を鏡へ映しては、埃に塗れてゐた昔の心を空恐ろしく思ふやうになつた。

保は、英子の死と共に因縁の理が分つた、力だけで何うすることも出来ぬ理が洞察て來た。

照子にも天の理を信ずる機會を神様から與わられた。

六八、日の寄進

それは或日のことであつた、照子は自分の部屋に籠つて横山のことばかり考へて居た。

「私、何時結婚するんだらう、横山さんの方は駄目なのか知ら、阿母さんも阿兄さ

んも随分だわ、決らないものなら最初から許嫁だの、未來の良人だのと云はないが可
いのよ、人の心を弄んでるわ」

ぶり／＼云つてゐた。其處へ兄の保と藝妓の花蝶が入つて來た。

「照子、お客さまだよ」

花蝶を座らせ、

「これが花嫁候補の照子嬢です、照子これはお前の爲めには出雲の神様だ、柏手を
打つて拜まなげやならんよ、は／＼」

「これは初めまして」

花蝶は丁寧な辭儀した、照子は何のことも知らずに顔を赤らめながら辭儀した。

「照に紹介するのを忘れて居た」

保は改めて、

「此人はお前の嫂、春江の兄の細君の妹の花子といふ人だ、藝名は花蝶と仰せられ

る、此度横山とお前のことに就いて態々出雲から御出張になつた、そんなことはない
が、は／＼」

「は／＼」

照子までが理由もなく笑つて居た。

「結局、簡単に云へば恁うなのだ、花蝶さんが大川の一件で横山へお禮に出かけた
ところが、横山は素晴らしい流行醫者になつてゐる、僕もお道病院といふ名を聞いては
居たが、横山が院長だとは實は初めて知つたのだ、天理を加味した療法で大成功をし
てゐる、ところで今以て無妻である、奥さんが欲しい、然るにお前が先約だ、此約束
を實行させて、一には横山先生へ報ひ、一には縁家の爲めに結ぶの勞を取らうと云ふ
のが此花蝶君の趣意で、それが爲めに態々來て下すつたのだがね、爰に一つの條件が
あるのだ、名がお道病院、實が天理を説いて精神的に病氣を治さうといふ横山先生の
夫人になるのだから、お前のやうに忠君宗では些と工合が悪い、天理教に改宗して天

理を信じ得られるなら先約を履んで女房に娶ひ受けやうといふのだが何うだ、改宗するか」

照子は黙つて首肯した。

「改宗する、諾、それから天理教信者になるか」

「なるわ」

「なる、これも諾、それで縁談が纏まつた」

花蝶の方を向いて、

「お聞きの通りですから早速御運びを願ひたいものです」

「結構ですわね、先方は天理教を信するなら娶はふ、此方は信じますと被仰るんだもの、恁那結構な縁談はございませぬわね、それでは早速運ぶことにいたしませう」

「何うも濟みません、足を運ばせて」

「いゝね、日の寄進をさせて貰つてると思つてますもの、はゝゝゝ」

其日から照子は懸命に天理教の信者となるべく努めた、道を聞くには至極便利であつた、兄の保、嫂の春江、母の武子までが天理教の信者であつたから。

六九、 一列澄まして

結納が交され、黄道吉日が来るまでに照子は全然天理教信者に成り澄して居た。

照子と横山哲夫は天理教の神前で結婚した、其年の秋には新築中のお道病院が落成して横山夫婦は其處に移り住んだ。

大川策次郎は詐欺罪で入獄し、仇地は相變らず金の奴隷となつてゐる、引き替わて松室権大教正は無罪放免となつた。

此放免の日を期して岩佐家で放免祝ひ、お道病院新築落成祝ひ、照子の結婚披露、武子の全快祝ひ、それに今一つ春江が帯屋（お産）ゆるしを受けた其祝ひを兼ねて、親戚一統が集まつた、集まつた程の者は皆お道の信者であつた。

岩佐家の佛間は今は二間のお神棚となつてゐる、保、武子、照子、春江に母の松子
 哲夫に花子にお竹、其他一同の者が神前に整座して心を澄しながら一齊に御勤めを初
 めた、御歌の聲が船場界限に響き渡つた。

……あしきを拂ふて助けせきこむ、一列すまして甘露臺 (了)

大正五年六月二十五日印刷
 大正五年六月二十日發行

著者

波堤道人

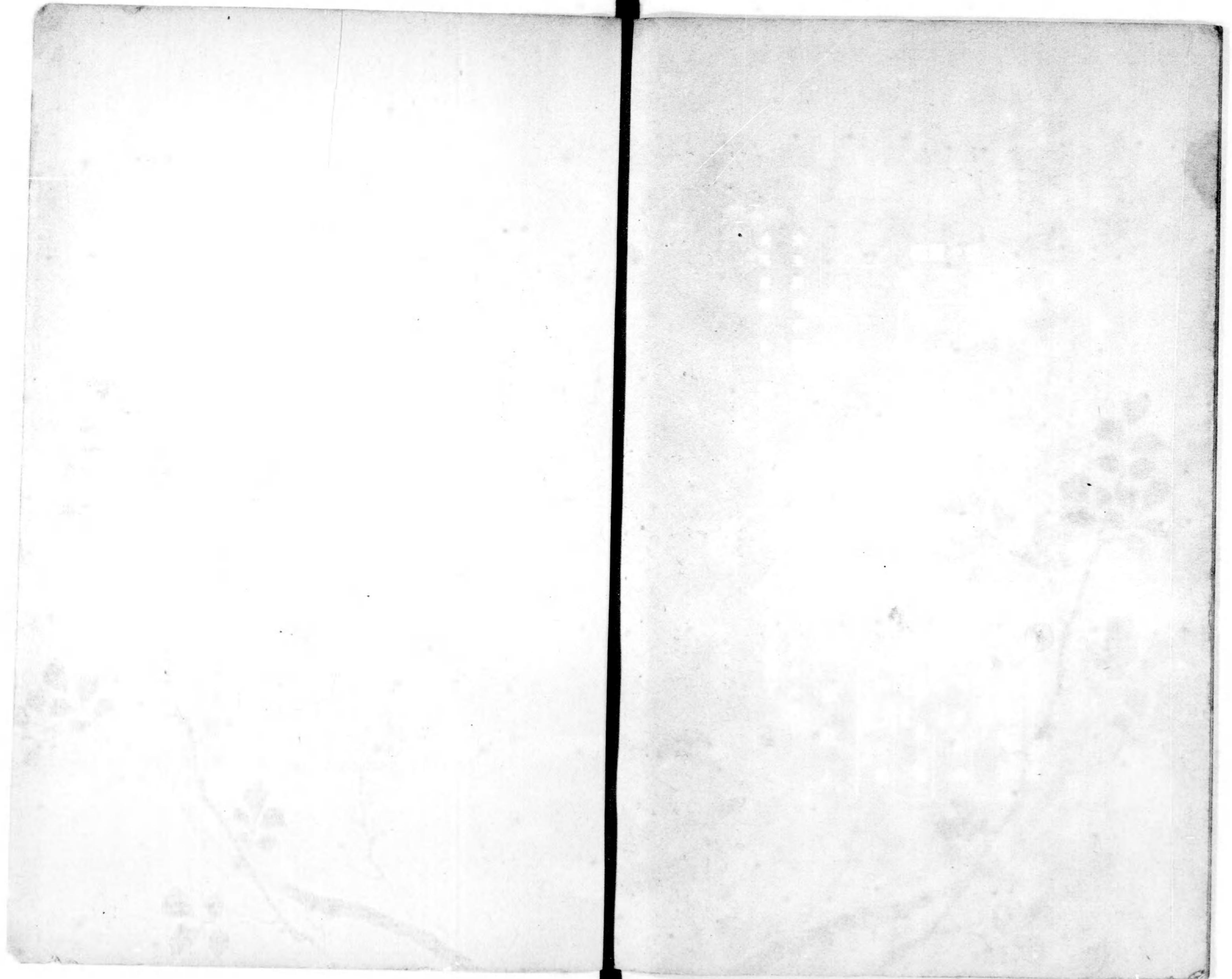


御道小説
 甘露臺

不許
 複製

— [行興無禁] —

發行所	大阪市北區山崎町電車前南入
發行所	寶六堂出版部
振替	大阪二七五二番



187
187



終

